

## 現代のことは

やまだ  
山田 奨治



子どものころに読んだ童話のなかに、じぶんとつての名作といえるものが、誰にでもあるだろう。親や祖父母に買ってもらって、何度も読み返した本もあれば、図書館で借りて数回しか読んでいないのに、強く記憶に残っている話もある。

高い丘のうえに、「ちいさいおうち」があった。季節が移ろいゆくなかで、「ちいさいおうち」はときには咲き乱れる花に囲まれ、またときにはしんと積もった雪に埋もれていた。やがて「ちいさいおうち」の周りには道路が造られ、家が建ち始め、にぎやかになってゆく。路面電車や高架鉄道、さらには地下鉄まで引かれて、「ちいさいおうち」は空き家になって、摩天楼の谷間に埋もれる。やがて、かつての住人の子孫が「ちいさいおうち」を静かな田舎へ移し、ハッピーエンドとなる。

## ちいさいおうち

都市化が自然環境の破壊をもたらすこと、開発や発展が必ずしも幸せをもたらさないことが、少年だったわたしにも直感的にわかった。大阪の実家の前の土の道路が、アスファルトで舗装されていく様子をみていてさみしさを感じたことや、舗装後には照り返して夏がとて暑くなっただことへの不満も、「ちいさいおうち」に共感した理由だったかもしれない。

わたしがいまでもこの童話にひかれるのは、香川にある母の実家が、「ちいさいおうち」のイメージに重なるからだ。わたしの「ちいさいおうち」は讃岐の古い民家で、瀬戸内海をみわたせる丘の中腹にある。子どものころは夏休みを決まってこの家で過ごした。水田や畑、竹藪に囲まれ、池でメダカやオタマジャクシをつかまえ、祖父の畑でとれたスイカを井戸水で冷やして食べ、いとこ

この部分は公開に適さないため削除されています。

たちと花火をして遊んだ。青年になってからあとは、母の実家は数年一度遊びに行くだけになってしまった。訪れるたびに、家の周りが拓けていくのがわかった。丘につながる広い舗装道路ができ、池はコンクリートで護岸され、田畑は住宅になり、竹藪が切り開かれた。祖父母はやがて近くに居を移し、家に住むとはいなくなった。九八年には家のすぐ上を高松東道路が通り、車がひっきりなしに行き来している。童話ほど極端ではないが、わたしの「ちいさいおうち」の様子をみてきた。なかが改装されて、いまは貸家として使われているようだった。童話の「ちいさいおうち」のように、幸せな余生を送ってほしいねと、そっと祈った。

(国際日本文化研究センター准教授 情報学)